

「十字架の愛と栄光」

(ヨハネによる福音書 13:31-35)

ユダが夜の闇へと出ていきました。そのとき主イエスは、「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった」と言われます。主イエスは裏切られ、十字架にかけられます。その死は人間の目から見れば完全なる敗北であり、悲惨なものでしかありません。しかし、主イエスはそのときを、神と御子とが「栄光を受けるとき」だと言われるのです。ここにある栄光は、自己実現の栄光とはまったく異なります。主イエスは十字架に自ら上ることで栄光を受け、神は独り子を十字架に差し出すことで、栄光を受けるのです。

神は主イエスの十字架を夜の闇に輝かせ、絶えることのない希望を示されました。神は御子の復活によって、人間に絶えることのない希望を与えられたのです。死は絶望の象徴だからです。神は絶望に勝る。主イエスはこの希望のために、十字架に上られました。自ら苦しみを引き受けることで、暗闇に生きる命と苦しみを分かち合うために、そして、死を超えた、絶望を超えた希望に、その命を導くためです。それゆえ、十字架は希望のはじまりに他なりません。ユダが夜の闇に出ていくとき、十字架の栄光が闇の中に輝き出したのです。

十字架にご自分の命を差し出してくださった主イエスは言います。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」父なる神は独り子の命を差し出し、主イエスは、ご自分の命をささげてくださる。それほどに人を愛し抜いてくださる。この父なる神と御子からの圧倒的な愛をいただくから、わたしたちは暗闇で凍えていても、十字架の灯りに照らされ、愛のぬくもりをいただくことができます。そして、今度は誰かにそのぬくもりを届ける者へと変えられます。そのとき、わたしたちは互いに愛し合う世界に迎えられているのです。

神の栄光と主イエスの栄光は、この愛の交わりの内に輝き、わたしたちはこの愛の交わりに迎えられるとき、命が輝きます。